

# 疑問文とモダリティ形式の関係

## —古代語の場合—

高山善行

### 1. はじめに

古代語の疑問文は、係助詞ヤ、カの記述的研究に重点が置かれ、係り結び研究の一部として扱われてきた。<sup>1</sup>しかし、疑問文の構成要素はヤ、カだけではなく、疑問詞、モダリティ形式（推量の助動詞）、文末助詞ゾなどもある。それらがどのような機能を果たし、どのように連携しているかを総合的に考える必要がある。なかでもモダリティ形式の役割は、平叙文と疑問文との連続性を考える上で重要と思われる。今回は、疑問文とモダリティ<sup>2</sup>の関係に焦点を当てる。「疑問と推量」については既に多くの研究があるが、本稿では研究の視点を転換し、モダリティの観点から疑問文を分析する方法を提案してみたい。

### 2. 研究史—疑問と推量をめぐって

疑問文とモダリティ形式の関係について取り上げた先行研究<sup>3</sup>を概観しておく。疑問と推量の関係をめぐる問題（「疑問—推量」問題と称する）については、様々な立場で論じられている。

- ・国語学の助動詞研究：多数<sup>4</sup>（「らむ」「らし」の違い、「めり」「終止なり」関係など）
- ・現代語モダリティ研究：寺村（1984）、森山（1989）、三宅（2011）など
- ・中古語モダリティ研究：近藤（泰）（2000）、高山（2002）など
- ・叙法論：尾上（2012）、野村（1997）、近藤（要）（1995）など
- ・通史的研究：阪倉（1993）、山口堯二（1990）、大鹿（2004）など

<sup>1</sup> 「焦点構文」の観点からの研究は、金水（2011）参照。疑問文の運用面については、高山（2014b）参照。

<sup>2</sup> 本稿での「モダリティ」は「モダリティ形式」を指す。「推量の助動詞」と読み替えても構わない。

<sup>3</sup> 以下、代表的なものを挙げる。古代語については近藤要司氏に一連の研究があるので、参照されたい。

<sup>4</sup> 松尾（1943）「めりは疑問体に用ゐられるか」など。

研究の立場が違っても以下の事実は認められている。

(1) 疑問文中の生起という観点から、モダリティ形式<sup>4</sup>は二類に分かれる。

モダリティ形式の二類は、具体的には(2)のようである。

(2) モダリティ形式の二類

【現代語】

生起	ソウダ（様態）、ダロウ、ウ、ヨウ、マイ
非生起/生起し にくい	ラシイ、ヨウダ、カモシレナイ、ニチガイナイ、 ソウダ（伝聞） など

【古代語】

生起	ム、ラム、ケム、マシ、ベシ、マジ、ジ
非生起/生起し にくい	メリ、終止ナリ、ラシ

助動詞論では「推量/推定」、大鹿(2004)は「叙実法/叙想法」を区別する。また、モダリティ論における「真性モダリティ/疑似モダリティ」とも結果的に重なる。

中古語の疑問文にモダリティ形式が生起する例を挙げておこう。

- (3) a. 南海の浜に吹き寄せられたるにやあらむ（竹取 47）
- b. のちにはいかがなりにけむ、知らず。（大和 380）
- c. いかでさすらむ、（枕 349）

(3b)は間接疑問文の萌芽と見られる例である。間接疑問文がどのように成立したかは興味深い問題であるが、本稿の目的とは異なるので、別稿を用意している。

### 3. 方法

#### 3. 1 出発点：近藤(1987)

本稿において「疑問—推量」問題を扱う上で、近藤(1987)を出発点としたい。同論文は、古代語疑問文研究の基本文献として広く知られている。

日本語においては疑問文が推量形を含んだ形で成立することができる。これは、古典語を例にすると、つぎのような文のことである。

かかるついでにみたてまつりたまはんや（源氏・若紫・一五八九）

古典語としてはごく当り前の文である。というより、むしろ疑問文はその大半が「む」などのいわゆる推量の助動詞を含んだ形で成り立っている。疑問文に推量形を含むのは古典語（また日本語全般）にはあまり当り前なので自然に感じているが、後述のようにこれは奇妙な構文であるといえる。<sup>5</sup> (p.271-272)

………中略………

詳しいことは今後の研究に待たねばならないが、疑問文の中に話者の主観的な要素を入れるのは推量の場合だけではない。現代語では次のように「丁寧」のムードも疑問文とともに使われやすい。というより、これを含まないと疑問文として不自然になると言ってもいいほどである。

「ます」…明日は学校へ行きますか。（cf.行くか？）

「です」…これはなんですか。（cf.なにか？）

このように主観的要素とともに用いられるのが日本語の疑問文の最大の特徴であると思われるのである。この点が今後の大きな研究課題と成り得るであろう。

（「六 疑問と推量と「や」と「か」の問題」 p.275）下線高山

近藤(1987)の指摘は疑問文と推量の関係を考える上で重要である。近藤論文が述べるように、古代語の疑問文が推量形式を伴うことが多いという事実は、古代語に関心のある人なら、誰でも知っている事実であろう。しかしながら、推量形を使う疑問文が、実際にどのくらい存在するかという調査はなされていないように思われる。そこで、平安初期～中期成立作品を資料として、実数を調査してみた。その結果は、表1のとおりである。

---

<sup>5</sup> 近藤(1987)では、古代語疑問文で推量形が多用される理由を間接疑問文の欠如の観点から説明している。

[表1 モダリティ形式の使用率]

	モダリティ形式/疑問文		使用率
	疑問詞	肯否	
竹取	疑問詞	46/52(88.5)	58/71(81.7)
	肯否	12/19(63.2)	
伊勢	疑問詞	41/49(83.7)	88/117(75.2)
	肯否	47/68(69.1)	
大和	疑問詞	79/100(79.0)	142/195(72.8)
	肯否	63/95(66.3)	
土佐	疑問詞	7/10(70.0)	23/30(76.7)
	肯否	16/20(80.0)	
枕	疑問詞	218/306(71.2)	284/441(64.4)
	肯否	66/135(48.9)	
源氏(葵～朝顔巻)	疑問詞	227/256(88.7)	334/428(78.0)
	肯否	107/172(62.2)	
総計	疑問詞	618/773(79.9)	929/1282(72.5)
	肯否	311/509(61.1)	

疑問詞＝疑問詞疑問文、肯否＝肯否疑問文 (反語を含む)

除外例：言いさし(「～にや」)、一語文(「いづら」「誰ぞ」など)、応答詞的なもの(「何かは」など)

参考 『万葉集』(巻一～五) 疑問詞33/55(60.0)、肯否109/142(76.8)、計142/197(72.1)

個々の用例に関して言えば、疑問文の認定に判断が揺れる場合が少なくない。したがって、表の数字は大まかな目安とお考えいただきたい。調査範囲における疑問文の総数 1282 例中、モダリティ形式が使用されたものが 929 例あり、使用率は約 7 割である。調査資料のなかでは、『竹取物語』の使用率が最も高く、81.7%であった。最も低いのは、『枕草子』の 64.4%である。参考までに、『万葉集』ではやはり 7 割程度となる。

### 3. 2 問題

表 1 の調査結果を受けて、疑問文中のモダリティ形式の使用をめぐるのは、(4)のような疑問が生じてくる。

(4)

- |   |
|---|
| <p>1) なぜ古代語疑問文でモダリティ形式がこれほど多用されるのか。</p> <p>2) 疑問文中のモダリティ形式はどういう働きをしているのか。</p> <p>3) 疑問文で、<u>モダリティ形式付き</u>と<u>なし</u>とはどう違うか。</p> |
|---|

ここで、1)～3)について補足しておく。

- 1) : 現代語と比較すると実感しやすい。現代語の疑問文でも「～だろうか」のように、モダリティ形式が用いられる場合はある。しかしながら、疑問文の7割も「～だろうか」という形をとっているようには感じられない。
- 2) : 古代語の疑問文は疑問詞、ヤ、カなどの構成要素からなるが、モダリティ形式はそれらと連携しているのであろうか。
- 3) : モダリティ形式付きの疑問文と、モダリティ形式なしの疑問文とでは、どのような違いがあるのか。これは、疑問文の運用の問題となる。

### 3.3 研究の視点

「疑問—推量」問題は、主にモダリティ論（叙法論）で論じられてきたため、モダリティ形式（叙法形式）の記述分析に向かう。つまり、これまでの研究では、疑問文をツールとしてモダリティ形式を分類するという方法をとっていたといえる。従来の研究では、平叙文をベースにおき、そのなかで助動詞、文法カテゴリーを観察していくのが通常であった。

しかしながら、この方法はモダリティ形式の分析や分類に役立つが、疑問文の研究にとっては有効でない。疑問文を分析するためには視点の転換が必要である。そこで本稿では、これまでの研究とは反対に、モダリティ形式をツールとして疑問文を分析する、という方法をとる。このような視点の研究が成り立つかどうかの実験を試みようというのが本稿のねらいである。

本稿で扱うモダリティ形式を表2に挙げておく。

[表2 中古語のモダリティ形式]

系	表現形式
形容詞系	ベシ、マジ
アリ系	メリ、終止ナリ
ム系	ム、ラム、ケム、マシ
特殊系	ジ

## 4. 分析

本節では、表1で調査した用例（全1282例）を対象として分析をおこなう。

#### 4. 1 疑問文のタイプ

まず分析の下準備として、疑問文をタイプ分けしておく。古代語疑問文をモダリティ形式の有無によって2つのタイプに分ける（仮に、「Aタイプ疑問文」「Bタイプ疑問文」と呼ぶ）。具体的には以下のとおりである。

##### (5) 疑問文のタイプ

- Aタイプ疑問文：モダリティ形式付き 例：いつくにか住むらむ。（大和 347）  
（ム/マシ/ラム/ケム/ベシ付き） ※マジ・ジは除く<sup>6</sup>
- Bタイプ疑問文：モダリティ形式なし 例：いつくにか住むφ。（枕 152）

先に表2で示したように、古代語ではAタイプが圧倒的に多く7割程度、残り3割がBタイプであることを確認しておきたい。

#### 4. 2 Aタイプ疑問文（モダリティ形式付き）

##### 4. 2. 1 条件文との親和性

Aタイプ疑問文は条件文との親和性をもち、条件文の帰結節となる。<sup>7</sup>Bタイプ疑問文は原則として帰結節に用いられない。

(6)a. かれが絶えば、何にかならむ。（枕 441）

（腰についている緒が切れた時は、どうしようというのだろう）

b. ものの聞こえもあらば、いかならむ（源 2-101）

（何ぞの噂を立てられもしたらどうなることか）

c. つゆ悪うもせば、沈みやせむ（枕 440）

（ちょっとでも下手をすれば、沈みもしようか）

d. （逆接）賽いみじくのろふとも、打ちはずしてむや（枕 267）

<sup>6</sup> 今回は否定推量形式は除いておく。用例数が少ないので、大きな影響はない。

<sup>7</sup> 「可能性の表現形式である仮定の条件形式は、後句の帰結に主体の推量・意志・命令・反語などの志向を導く傾向が強い。」山口(1980:p.92)

(たとえ賽をひどく呪っても、わたしが打ちはずしてしまうはずがあるうか)

e. 台風が上陸したら、明日は休講になるだろうか。

f. 来年度も定員割れしたら、どうしようか。

古代語における条件文帰結のモダリティ制約については、高山(1993)の調査・分析がある。その結果を表3に挙げておく。なお、現代語については、益岡(1987)などがある。

[表3 条件文帰結のモダリティ形式]

生起	ム、マシ、ベシ
非生起/生起しにく い	メリ、終止ナリ、ラム、ケム

※高山(1993)の調査による。

Aタイプ疑問文も基本的にモダリティ制約に従う。ただし、ラム、ケムは、Aタイプ疑問文に生起するが、条件文帰結では非生起である。<sup>8</sup>条件文帰結におけるAタイプ疑問文のモダリティ形式は事態の非現実性を表し、平叙文の場合と変わらない。

#### 4. 2. 2 条件節とマシ疑問文

Aタイプ疑問文のうち、マシが用いられるものを「マシ疑問文」と呼ぶことにしよう。マシ疑問文は条件文帰結部に生起することができる。

(7)a. いかにしていかに知らましいつはりを空にただすの神なかりせば(枕 313)  
[セバ~マシ]

(どういう方法によってそなたのそら言をどう知ったろうか、知ることはできなかつたろうに、もし天にあって偽りを証拠なしに判断する糺の神がいらっしやらないのだったら)

b. 見し人の松の千歳に見ましかば遠く悲しき別れせましや(土佐 56) [マシ

<sup>8</sup> ラム、ケムはムなどと違って原因推量用法をもつ。その事実が示唆するように、現実事態を対象とする性質があり、非現実性の濃い条件文とは相容れないのであろう。

カバ～マシ]

(亡くなったあの子を松の千歳にあやかって長生きするものと見たかった。  
そうだったらなんでこんなに遠く、悲しい別れをするものか)

- c. (左大臣)「もしはべる世ならましかば、いかやうに思ひ嘆きはべらまし」  
(源氏 2-166) [マシカバ～マシ]  
( (葵の上が) もし生きておりましたらどんなに心を痛めたことごさいま  
しょう)

「セバ/マシカバ～マシ」の呼応関係は疑問文でも保持されている。マシの機能である反事実性表示も変わらない。<sup>9</sup>

#### 4. 2. 3 節とモダリティ形式

ここで、古代語における節とモダリティ形式の関係について考えてみよう。古代語では節ごとにモダリティ形式を付加し、事態に非現実性のマークを付けていくという表現方法が見られる。<sup>10</sup>

- (8)a. 【連体節】 思はむ子を法師になしたらむこそ、… (枕・32)  
(かわいい子を法師にしたのは、…)
- b. 【準体節】 卯榎の木によからむ切りておろせ。(枕・266)  
(卯榎の木によさそうなを切っておろしてちょうだい)
- c. 【接続節】 さて思ひ返したらむは、わびしかりなむかし。(枕・314)  
(そんなふうにして考えなおすとしたら、きっとわびしいことであろうよ)

事態の現実性—非現実性の対立が、「 $\phi$ —モダリティ形式」の対立によって明示されるわけである。ただし、場面・文脈条件によって、モダリティ形式付加が省略される場合もあり、義務的でないことは注意が必要である。

現代語では事態とモダリティが分離しており、テンス・アスペクト等とともに階層をなす。一方、古代語では、事態(コトガラ)部分とモダリティ部分が

<sup>9</sup>疑問文中のマシをムと同一視する説もあるが、山口(1980)に従い、ムとマシの使い分けがあるとみておく。

<sup>10</sup> 連体節とモダリティ形式の関係については高山(2005)、接続節との関係については高山(2014a)参照。通時的観点からは、福嶋(2014)がある。



分離せず、融合的・一体的である。<sup>11</sup>

条件文の帰結において、古代語の疑問文は節の現実性/非現実性表示の規則に従う。つまり、疑問文におけるモダリティ形式は、第一義的には事態の非現実を表示するにすぎない。

#### 4. 3 Bタイプ疑問文（モダリティ形式なし）

次に、Bタイプ疑問文について見ていこう。Bタイプ疑問文とは以下のようなものである。

(9)a. これを見て船より下りて、「この山の名を何とか申す」と問ふ。女、答へていはく、「これは、蓬萊の山なり」と答ふ。（竹取 32）

（これを見て、船からおりて、「この山の名は何と申しますか」とたずねる。女が答えて言うには、「これは蓬萊の山です」と答えます。）

b. 壁をへだてたる男、「聞きたまふや、西こそ」といひければ、「なにごと」といらへければ、「この鹿の鳴くは聞きたうぶや」といひければ、「き聞きはべり」といらへけり。男、「さて、それをばいかが聞きたまふ」といひければ、女ふといらへけり。（大和 394）

（壁をへだてている男が、「お聞きになっていきますか、西隣りさん」といったので、「何を」と答えたところ、男はさらに、「この鹿の鳴く声はお聞きになりましたか」といったので、「はい、聞いております」と答えた。男は、「それで、それをどのようにお聞きになりましたか」といったので、女はすぐさま答えた。）

c. 若き人々（若い女房たち）出で来て、「男やある」「子やある」「いづくにか住む」など、口々問ふに、をかしごとそへごとなどをすれば、「歌はうたふや。舞などはするか」と問ひも果てぬに、…（枕 152）

（若い女房たちが出て来て、「夫はいるのか」、「子供はいるのか」、「どこに住むのか」などと、口々に聞くと、おもしろいことや、あてつけの冗談を言ったりするので、「歌はうたうのか、舞なんかはするのか」と聞きも終わらないうちに、）

---

<sup>11</sup>分析において、発話者の判断に重点を置くか、事態の様相に重点を置くか、という問題がある。小柳(2014)参照。通史的観点からの〈事態〉と〈主体〉の関係については、高山(2015)で論じた。

d. (老女房)「かれは誰ぞ。何人ぞ」と問ふ。名のりして、…(源氏 2-346)  
(「そこにいるのはどなた。どういうお人です」と尋ねる。惟光は名を告げて、…)

e. (源氏)「などかいと久しかりつる。いかにぞ。…」とのたまへば、(惟光)「しかじかなむたどり寄りてはべりつる。…」(2-347)

(「どうしてこんなに長くかかったのか。どんな様子だった。…」とおっしゃると、「かようかようなことで、ようやく尋ね寄りましてございます…」)

これらの疑問文は、下記のような特徴をもつ。

(10)

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>① 対話場面が目立つ→質問文(問答)、即答性、連続性</li><li>② 存在詞述語が多い(「碁盤はべりや」枕 288)</li><li>③ 述語は基本形、キ、ツが多い(タリ、リ、ヌ、ケリ少数)</li><li>④ 「～と問ふ」等で質問文であることを明示</li><li>⑤ ダイクシス要素(指示詞など)が目立つ</li></ul> |
|--|

以上、Bタイプ疑問文の特徴を見てきた。

## 5. まとめ

ここで、Aタイプ疑問文とBタイプ疑問文の特徴とよく使用される文について述べておく。

### ● Aタイプ疑問文(想像型疑問文)

地の文、心内文で多く用いられ、話者(作者)の想像する事態を対象とする。モダリティ形式は事態の非現実表示に用いられる。心内文での使用からわかるように、Aタイプ疑問文は疑い志向の性格が強い。<sup>12</sup>

### ● Bタイプ疑問文(現場型疑問文)

会話文(特に対話の現場)で多く用いられ、実際に現場にある事態(または既定の事態)を対象とする。こうした特徴から、Bタイプ疑問文は問い志向の

<sup>12</sup> 特に、物語作品の地の文においては、「～ニヤ～ケム」型のはさみこみ疑問文が頻出し、興味深い。このタイプの疑問文については、別稿を準備している。

性格が強い。

ここで、モダリティの観点から古代語疑問文を分類すると以下のようになる。疑問文の下位タイプも合わせて示しておく。<sup>13</sup>

疑問文の類型		よく使用される文
疑問文	Aタイプ疑問文（想像型） <ul style="list-style-type: none"> <li>…… 設想タイプ（ム）</li> <li>…… 反実タイプ（マシ）</li> <li>…… 当為タイプ（ベシ）</li> <li>…… 既定タイプ（ケム、ラム）</li> </ul>	地の文、心内文、歌
	Bタイプ疑問文（現場型） <ul style="list-style-type: none"> <li>…… 実在タイプ（基本形、タリ、リ）</li> <li>…… 既定タイプ（キ、ツなど）</li> </ul>	会話文、歌

※「何事ぞ。」「いづら。」「誰。」のように、一語文的なものはBタイプが多い。

## 6. おわりに

本稿では、モダリティ形式を分析装置として古代語疑問文を捉えようと試みた。仮説の提示にとどまるものであり、実証については今後の作業となる。

最後に、現代語疑問文との対比の観点から述べておく。古代語疑問文は、解答を要求するのではなく、疑っているポーズ（擬態）をとるもののがかなりある。つまり、疑い志向であるといえる。<sup>14</sup>われわれは、典型的な疑問文を頭に浮かべるとき、「問い—答え」の整った質問文をイメージする。しかしながら、古代語の場合、疑問文と平叙文との距離は、現代語より小さいように思われる。文論の根本問題に関わることだが、<sup>15</sup>本稿の考究の範囲を超える。今後さらに検討してみたいと思う。

使用本文：新編日本古典文学全集・小学館 ※用例末尾の括弧内の数字は頁数

<sup>13</sup> 想像型と現場型の対立は、指示詞の観念指示と現場指示を想起させるかもしれない。指示詞とモダリティはいずれも世界の分割に関わるので、パラレルに捉えうる側面をもつと思われる。

<sup>14</sup> ただし、テキストの性格について注意が必要である。もともと対話型テキストが少ないために、Bタイプは出てきにくい可能性がある。

<sup>15</sup> 山田文法で積極的に、「平叙文—疑問文」の対立を立てていないことも参考にすべきであろう。

## 引用文献

- 小柳智一(2014)「古代日本語研究と通言語学的研究」定延利之編『日本語学と通言語学的研究との対話』くろしお出版
- 大鹿薫久(2004)「モダリティを文法史的にみる」、北原保雄監修、尾上圭介編『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』朝倉書店
- 尾上圭介(2012)「不変化助動詞とは何か―叙法論と主観表現要素論の分岐点―」『国語と国文学』89-3
- 高山善行(1993)「モダリティとモード―古代語における仮定条件文の帰結表現をめぐって―」『日本語学』12-13、後に、高山(2002)所収。
- 高山善行(2002)『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房
- 高山善行(2005)「助動詞「む」の連体用法について」『日本語の研究』1-4
- 高山善行(2014a)「条件表現とモダリティ表現の接点―「む」の仮定用法をめぐって―」、益岡隆志他編『日本語複文構文の研究』ひつじ書房
- 高山善行(2014b)「配慮表現の歴史的变化」、野田尚史・高山善行・小林隆編『日本語の配慮表現の多様性』くろしお出版
- 高山善行(2015)「文構造の史的展開―〈事態〉と〈主体〉の関係をめぐって―」「関西外国語大学 第1回言語・文化コロキウム、パネルディスカッション発表資料」
- 金水敏(2011)「第3章 統語論」、金水敏他編『シリーズ日本語史3 文法史』岩波書店
- 衣畑智秀(2014)「日本語疑問文の歴史変化―上代から中世―」青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究2』ひつじ書房
- 近藤泰弘(1987)「古文における疑問表現―「や」と「か」―」、『国文法講座3 古典解釈と文法―助詞の機能』明治書院、後に近藤(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房所収
- 近藤要司(1995)「『源氏物語』の助詞ヤについて」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』明治書院
- 阪倉篤義(1993)『日本語表現の流れ』岩波書店
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野村剛史(1997)「三代集のラムの構文法」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房
- 福嶋健伸(2014)「従属節において意志・推量形式が減少したのはなぜか」益岡隆志他編『日本語複文構文の研究』ひつじ書房
- 益岡隆志(1987)「モダリティの構造と意味―価値判断のモダリティをめぐって―」『日本語学』6-7
- 松尾捨治郎(1943)『助動詞の研究』文学社

三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版

森山卓郎(1989)「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』  
くろしお出版

山口堯二(1980)『古代接統法の研究』明治書院

山口堯二(1990)『日本語疑問表現通史』明治書院

[付記]本稿は、平成 26 年度日本学術振興会科学研究費「平安時代語における非典型的タイプ条件文の記述的研究」(挑戦的萌芽研究、課題番号 26580083)の研究成果の一部である。